泰国日本人納骨堂建立　八十周年記念誌
平成二十九年十一月二十一日　発行
編集発行者　高野山真言宗タイ国開教留学僧の会
会長　長原敬峰
事務局　〒九七〇-〇三一一
いわき市江名字天ヶ作三一八
真福寺内
TEL　〇二四六-五五-七八四三
印刷製本　京都市南区吉祥院嶋高町七〇番地
㈱吉祥堂

戦後の日本人納骨堂と辻政信大佐

村嶋英治

辻政信（一九〇二年十月十一日生、一九六八年七月二十日死亡宣告）参議院議員は、一九六一年四月ラオスで消息不明になった時も僧形であったが、ここで紹介したいのは、一九四五年八月終戦時の話である。「作戦の神様」とも讃えられた辻政信大佐は、終戦時、バンコクに司令部を置く第十八方面軍（一九四五年七月十六日編成、略称義部隊、司令官は中村明人中将）の作戦担当課長（第一課長）であった。激戦のビルマ戦線にあった辻は、一九四五年五月二十四日に在タイ軍（当時は未だ十八方面軍ではなく、一九四四年十二月八日に編成された第三十九軍）への異動命令を受け、六月五日にバンコクに着任した。彼の任務は、ビルマ陥落後、次はタイに侵攻してくるはずの英軍に備えることであった。

辻は敗戦の日の八月十五日に「何とかして坊主になりタイ国に潜ろう」と覚悟を決めた（辻政信『潜行三千里』、毎日新聞社、一九五〇年六月五日発行、二六頁）。辻の意図を伝え聞いた七名の若い少尉や見習士官（全員僧侶出身）が、同行を志願した。彼等は、日本の東南アジア作戦の総司令部であった南方総軍（終戦時の司令部はベトナムのダラットに所在）の特攻隊要員であったが、乗るべき飛行機もなくなった

ためバンコクの十八方面軍に割当てられて地上の勤務に就いていた。辻を含む八名は、日本人経営のタイランド・ホテルの一室でタイの僧衣に着替えた（同上書、二八頁）。

青年僧の姿になった七名は八月十六日に、ワット・リャップ内の日本人納骨堂に入り、辻は翌十七日早朝同所に入った。辻が、十八方面軍がタイでの対英決戦のために備蓄していた大量の食糧や必要物資の一部および高額の資金や金塊を持ち込んだことは言うまでもない。

筆者は一九九〇年前後、未だ生き残っておられた在タイ日本軍の軍人・関係者多数にインタビューを行い、貴重な資料なども複写させて頂いたことがある。第十八方面軍の参謀部は三課から成り、第一課長（作戦）は辻政信大佐、第二課長（情報）は矢野正俊大佐（陸士三十七期）、第三課長（後方）は小西健雄大佐（辻政信第一課長と同期で陸士三十六期）であった。この三人中、矢野正俊、小西健雄の両氏には、それぞれ熊本市黒髪、東京の武蔵境で、ギリギリながらお目にかかることができた。この外にも、参謀の原寿雄少佐（和歌山市）、憲兵隊副司令官の堀井龍司中佐（東京）、憲兵隊特高課長岩崎礼三少佐（大阪）、中野学校出身の大場啓少佐（東京）、貝沼研造少佐（秋田）、楠本機関長の小田正身（三重）、大川周明塾で訓練を受けた逆瀬川澄夫（兵庫県西宮市）、新井章（東京）、岩崎陽二（大分県佐伯市）などの各氏にもお目にかかった。また、民間人では三菱商事バンコク支店長の新田義實（一八九四―一九九二、戦後は明和産業社長）、日タイ文化研究所の平等通照（一九〇三―一九九三、横浜市港北区新羽善教寺住職）などの諸氏などであった。これらの方々は、現在では殆ど故人となられてしまったものと思われるが、諸氏から頂いた貴重な資料は、この二五年間、別の調査にかまけて殆ど利用することもなく放置状態になってお

り、誠に忸怩たるものがある。

在タイ日本軍の経理責任者であった第三課長小西健雄氏（戦後はポーラ化粧品の中部地区責任者）の話では、日本軍が持っていた金塊の多くは、敗戦後バーツなどに現金化して各部隊に配布した。残した金は英軍に没収されないようにするため、池の中など様々な場所に隠したが、英軍は、結婚指輪や金歯までは取り上げないだろうと考え、金の指輪を多数作成して将校に配布し、また彼等の歯を金歯にしたということである。

さて辻政信の話に戻ると、辻は日本人納骨堂滞在二週間前後の内に順次青年僧たちをワット・マハタート寺に移した。一九四五年九月に入って英軍のタイ進駐が始まり、民間日本人はバーンブゥアトーンに抑留されてしまうと、辻には逮捕されるのではないかという不安が高まった。十月二十二日には、今まで自由であった日本人僧侶も抑留の対象者とされるという情報がもたらされ、かつ辻は一応遺書を書き自殺したことにはなっていたが、英軍は十八方面軍司令部に辻を出頭させるように命令してきた。追及が身近に迫ったと考えた辻は、タイ潜入の継続を諦め中国への脱出の道を探るため、十月二十三日［辻は日曜日と書いているが、二十三日は火曜日］に、スリウォン街に戦後開設された中華民国国民党海外部駐暹辦事処［正しくは「海外部泰国特派員辦事処」］に、成主任［フルネームは、成烟景］宛ての手紙を届けた。内容は、九月二十八日［正しくは九月二十一日から］に頂点に達した華僑暴動（ヤワラート事件）の裏面情報を知っているから、成主任に納骨堂に十月二十六日までに来て欲しいというものであった。しかし、三日間が過ぎ二十七日になっても成主任は現れなかった（同上書、八〇―八二頁）。

ヤワラート事件（華僑は九・二一事件という）とは、日本の敗戦とともにベトナム・ラオスにまで進駐してきた中国国民党政府の軍隊を、タイにまで進駐させる口実作りのために在タイ中国国民党（当時の責任者は成主任）が暴動を煽動し、これをタイ軍が武力弾圧して華僑に多数の死者が出たため、華僑の一斉罷市罷工（ストライキ）となったが、在タイ中国国民党の指令で九月三十日朝を以て罷市罷工を収拾させた事件である。そうであれば、事件の主導者である成主任が辻の裏面情報なるものに魅力を感じずに放置したのは当然のことであろう。

しびれを切らした辻は、十月二十八日朝、再び辦事処を訪ねた。

「先日の取次ぎの青年が愛想よく迎えてくれ、応接間に通されて暫く待つ内に一癖ありそうな青年が颯爽として乗り込んだ。筆談の結果郭〔郭開又は郭子凱、海南人、一九一八年サムイ島生、一九七九年バンコクで死亡、辻は広東人と誤記〕科長であった。暫くののち成〔烟景、一九一九年生〕主任秘書が出勤した。年はよもや三十歳にはなるまい。色白の痩型の美青年だ。この人が邢〔森洲、海南人〕中将の代理として百五十万の華僑の事実上の全責任者であろうとは誰が予想し得よう。服部〔卓四郎、辻より二期先輩〕大佐の昔の姿そっくりだ。この人こそ服部さんに代って、この身を助けにきたのではあるまいかとの錯覚さえ起った。

山法師のような坊主が鉄の手で成青年のきゃしゃな白い手を固く握ったとき、相手の顔に紅がさすのを見逃さなかった。約一時間に亘って筆談した。片言の北京官話は広東出身のものには全く通じないのだ。本名、経歴、特に東亜聯盟運動、蔣母慰霊祭、戴笠との関係―等々余すところなく書いた。

重慶に赴き戴笠将軍及び蔣主席に会見し、日華合作の第一歩を開きたい。もし不可能ならば直ちに逮捕し英軍司令部に差出されたい。

「生命を惜しんで逃避するものではない」と力強く最後の結論を書いた。

一々首肯しながら読んでいた両青年の面上は次第に紅潮し、両眼には光がさしてきた。

やがて成青年は「等一候、我們要会議」（暫く待て、会議する）と紙片に書いて次の間に入った。凶か吉か？　待つこと約三十分の後ニコニコ笑顔で入って来た。占めた！　と感ずる。成青年は細いきゃしゃな手先で、

可以（よろしい）

と二字だけ書いた。後は郭科長と相談せよとのこと、郭君は筆談で「今晩九時、自動車で寺の付近に迎えにゆく。」と。捨身の断によって遂に光明を見出した。

それにしても三十歳にも達しないこれらの青年が、百五十万の華僑の総元締たる那中将に代って一切を処理し、九・二八〔正しくは九・二一〕事件の交渉をタイ英両国を向うに廻し、堂々やっているのかと羨しくなった。顧みればこの年代はまだ一中尉で、陸大の学生として戦術教官と喧嘩するのが関の山であった前半生である。

英国から追及されている身を国家の公務員たる彼らがかばうことは、下手すると国際問題を惹起する。日本の官僚、日本の外交官だったら、この突差の場合に果してどれだけの処置を取れたであろう。恐らく『重慶に問合せるから暫く待て。』というのが関の山であろう。

感激と興奮とを抑えながら再びサムローに乗って何食わぬ顔をしてお寺に帰った。」（同上書。八三―八五頁）。

辻はこの夜、僧衣を脱ぎ偽装のため遺書を残して、納骨堂を出た。翌朝辦事処に到着した辻は、郊外の隠れ家に移された。辻に梁、呉の二青年が同行して、十一月一日に汽車でバンコクを発ち、ウドン（辻はウボンと誤記）に向かった。ラオス、ベトナムを経て四六年三月九日にはハノイを発ち昆明に入った（同上書、一七九頁）。

筆者は、辻政信が頼った、当時の在タイ国民党のトップであった成烟景主任秘書に、同じくスリウォン街にあった泰国留華同学会黄埔校友会の事務所で、一九九四年一月六日に会ったことがある。この校友会は、タイ華僑で日中戦争時に中国に帰国して黄埔軍官学校分校に学び、抗日戦争に参加した人達の団体である。事務所はその後、バーンナー・タラート路のネーション新聞社と道を挟んで反対側辺りに建設された泰華英烈館に移った。

成烟景は偽名で、本名は陳英謹（一九一九年潮州生、辻は海南人と誤記）である。偽名と本名は中国語で発音した場合、比較的近い音となる。陳英謹は筆者に次のように語った。

辻政信は、まず手紙を寄越し、ワット・リャップに会いに来て欲しいと求めた。仕事が多忙であったので、放置していると、辻は僧衣のまま事務所に現れた。辻は少し中国語ができた。英語、中国語ごちゃまぜで三〇分ほど話した。蔣介石の妻〔陳英謹の記憶違い、正しくは母堂〕の葬儀を、辻が盛大にやった時の写真も持参しており、英軍には捕まりたくない、どうか重慶に行けるように助けて欲しい、重慶でどうされようとも構わないから、と率直に援助を求めた。辻が会いに来るまで、辻という人物については、彼の経歴も含めて全く知らなかった。辻が葬儀写真を証拠にもってきたので、重慶に送ったのち彼が歓迎されるのか、戦犯とされるのかは我々の与り知らぬことであるが、とにかく重慶に送ってやろうと仲間と協議して決めた。この決定に当たっては上部に何ら相談しなかった。

辻は日本に帰国後、手紙を送ってきた。戦後一〇年くらいした頃に、私（陳英謹）は日本を初めて訪問した。当時製紙工場を経営していたので、製紙関係の機械を買うことが目的であった。国会議事堂の食堂で辻と食事をした。また自宅を訪問した時には、辻の家族は全員土下座して感謝を示した。中国人には土下座をしてお礼をする習慣はなく、しかもいつまで経っても顔を上げないので、全く面食らった。それから更に一〇年くらいして二回目の訪日をした。ガムテープ製造の機械を買うためである。辻は既にいなくなっていたが、辻の妻や娘婿が極めて厚遇を与えてくれた、と。

なお、成烟景（陳英謹）及び郭開（郭子凱）の経歴は、泰国黄埔校友会『鉄血雄風：泰国華僑抗日実録』（一九九一年、バンコク）のそれぞれ、三二九―三三〇頁。八二―八六頁に見ることができる。

上記、辻の『潜行三千里』および陳英謹の証言から見て、辻政信は、在タイ中国国民党組織の庇護の下に一九四五年十一月一日にはバンコクを発ち、四十六年三月九日には中国に到着したことは疑いないであろう。ところが、一九九九年になって、イギリス人ジャーナリスト某によって『革命国王』という英文書物が出版された。同書は、ラーマ八世王がお亡くなりになった一九四六年六月九日当時、辻政信は僧形で依然バンコクに潜んでおり、同王暗殺に関わったと繰り返し述べ、最後を、もし辻政信が一九四五年に英

軍に捕らえられていれば、八世王が暗殺されることはなかったであろうと結んでいる。何とも荒唐無稽な話である。故意の捏造偽造により日本人を貶めることをなりわいとする悪質売文業者の輩は、どこにでもいるようである。同書には、日本にまで行って調査した結果であると書いてあるので笑ってしまうが、笑止千万のままで済ませていると、将来この仕掛け爆弾が爆発して、良好な日タイ関係を傷つけないとも限らない。

一九五〇年六月に日本で刊行された『潜行三千里』は、一九五四年十二月にはタイ語訳本が出版された。そのカバーにはワット・リャップの日本人納骨堂と辻政信大佐の写真を使っている。訳者はウタイ・タンタラークンで、タイトルは辻大佐の階級を勝手に将軍にかさ上げして『将軍の潜行』と変更されている。本のスタイルで出版される前には、グンサトリーという婦人雑誌に連載したそうだ。

タイ語訳書の訳者前書きによれば、訳者たちは日本人納骨堂がどこにあるのかを知らなかったが、ようやくその場所を探し当てて、一九五四年四月に訪問した。日本語『潜行三千里』には、一九四五年八月の日本人納骨堂は、敷地が広く、牆壁を廻らし、僧侶の庫裏、井戸、食堂、多数の樹木と広場があったことが描かれているが、現在（一九五四年）は、お堂がただ一つ残るのみであった。お堂には三年前からタイ人の僧プラ・ニョムが一人で住み、堂内には様々な形の仏像を収集安置している。寺で下働きしている、チャイというタイ人男性は辻という名前は知らないが、終戦時にビルマから来た巡礼僧（プラ・トゥドン）が納骨堂に住むようになったこと、この僧と一緒に納骨堂に侵入した泥棒を追いかけたこと、この僧は三、四ヶ月でいなくなったことを語ったという。

これが、戦後日本人会が再発足した、一九五三―五四年頃の日本人納骨堂の有様である。

（『クルンテープ』二〇一五年四月号より転載）

【参考文献】

○　辻政信著『潜行三千里』、毎日新聞社、一九五〇年六月五日発行。
○　泰国黄埔校友会『鉄血雄風：泰国華僑抗日実録』、一九九一年、バンコク。
○　タイ国日本人会『クルンテープ』、二〇一五年四月号、バンコク。